

90分の枠を超えて生きる授業

都市教養プログラム「文化分析批評入門」がめざすもの

基礎教育センター 助教授
亀澤美由紀

「文化分析批評入門」と題したこの講義に関して、この報告書では、授業内容や授業の進め方、授業を行うにあたっての工夫や心がけ等を反省の意味も込めてまとめてみたいと思う。

1. 授業目的および内容

シラバスに掲載した授業目的は次のとおりである。「文化現象のなかに政治性を読み取ることの可能性を探り、いかなる力にも還元されることのない方法で既成の枠組みを打破することのできるような思考のあり方を探る。」

シラバスの授業目的は学生にとっては難しく聞こえたかもしれないが、授業内容の説明欄および実際の授業では抽象的な説明を極力避け、学生が90分間関心をもって聞けるように話題を豊富にとりそろえたつもりである。われわれがいかに二項対立的な考え方に絡みとられてしまっているか、そこに気づくことが差別のない社会をつくるためにいかに大切であるかを説くのが本講義の狙いである。そして学生たちひとりひとりに、自分のなかに巣食っている二項対立的な考え方に気づいてもらうこと、これが最終的な目標である。したがって、テストレポートも学生ひとりひとりがこの講義内容に照らして自分自身を分析することによってはじめて書けるという内容の課題である。すなわち「アート、ことば、二項対立的な考え方などから、ひとつをとりあげて、この講義の主旨に照らして論じなさい」というものであった。

2. 授業の流れ

講義は大きく3つに分かれている。最初の4~5回でヨーコ・オノ、夏目漱石、筒井康隆、トマス・ハーディといったアートや文学を題材に、作者/作品、作品/読者、作者/読者といった二項対立的な主体中心論がいかに根拠のない、権威主義思想にもとづいたものであるかを論じた。具

体的でわかりやすい題材を扱うことによって、この講義の基調となる考え方を学生たちに理解してもらうのがこの第一段階の目的である。

それに続く第二段階では、こうした思想が生まれる基盤となった理論（精神分析、言語学、文化人類学）をそれぞれ（非常に乱暴ではあるが）1~2時間ずつで紹介した。第二段階が終わるのが5月の末頃である。第二段階を終えると学生もこの講義の主旨を十分に理解し、それを支える理論的枠組みも理解するようになるので、この時点でテストレポートの課題を発表した。

そして、残り2ヶ月の授業（第三段階）は学生のレポート作成の参考となるように、さまざまなシュミレーションを行った。この第三段階では「異性愛者/同性愛者」という二項対立や、「ペドフィリア」（小児性愛者）ということばをめぐって現在の欧米社会に発生しつつある新たな被差別グループ実体化の問題などを論じた。

以上をまとめると、この講義は以下のようなサンドイッチ構造になっていると言えよう。すなわち、講義の核をなす思想的枠組みの理論説明（第二段階）、それをはさむようにして理論の実践編がそれぞれ第一段階（導入）と第三段階（応用シュミレーション）で配置される。学生は第一段階と第二段階で講義の主旨を理解し、第三段階を受講しながらレポートの内容を考えることになる。

一方、一回一回の講義はできるだけそれぞれの回で完結するようにした。欠席したために授業内容についていけなくなり、あとの講義に対する関心を失ってしまうようでは、学生の自発的な授業態度を期待できなくなると考えたからである。そこにいない者はともかく、出席している学生には全員、少なくとも受けている授業に関しては理解し、知的快感を味わってもらいたいと願う次第である。また、毎回の授業の最初に前回の講義内容の要点を繰り返し、それがこの講義の核となる考え方（二項対立を崩す）とどう

関連するかを説明した。その狙いは、講義全体の主題と流れを明確に提示することにある。そして最後の2ヶ月間は、「このような枠組みで、あなただったらどのようなテーマを選び、どのような論を展開するか」と問いかけ続けるのである。講義のひとつひとつにレポートのテーマ選びのきっかけとなるヒントを配したつもりである。

3. 成績評価

成績評価はテストレポートによった。実のところ、シラバスでは「レポート」としたのだが、予定していた人数を上回ったためにテストレポートに変更した。その変更については4月最初の授業で明らかにしたため、学生からの苦情等はなかった。

テストレポートの課題は前述のとおりであるが、おもに二つの点に関して工夫した。第一に、学生がレポートを書きやすいようにできる限りの配慮をしたつもりである。5月末にレポート課題を発表したのもそのためである。また6月には、その時点で考えているテーマを提出してもらった（無記名）。その中からレポートとして面白くなりそうなものを授業で紹介したり、レポートのテーマとするには難しそうなものには警告を発したりした。この時点ではまだテーマを探しあぐねている学生も多く、彼らにとっては他の学生のテーマを知ることは大いに参考になったようだ。

二つめに考慮したのは、出席率をいかにして成績評価に組み込むかという点である。学生の自発的な授業参加を期待したので、出席は一度もとらなかった。このことに関して学生からは「出席をとって欲しかった」というコメントもあった。うまくレポートが書けるかどうかかわからないので、せめて真面目に出席したらその分を見て欲しいとの意味だと解している。一回だけのテストで成績評価を下される学生の気持ちもわからぬではない。

この微妙な問題を解決すべく、今回のテストでは講義の出席率が明確に反映されるような正誤問題を組み入れた。テスト前夜にノートを暗記する必要はまったくないが、講義に出席していなかったら判断できない、といった内容で10の文章を作成した。本講義は内容が本質的に非常に抽象的なため、人のノートを借りて勉強してもおそらく理解できないだろうと推察する。したがって、テスト直前にノートを借りて勉強しても、これらの正誤問題に対して「ま

ぐれ当たり」を連発するのはほぼ不可能だろう。10問中の正答率とレポートの内容を合わせて成績を下したが、ほぼ適正な成績評価ができたであろうことを願う。もっとも、この点については受講生に聞いてみなければわからないことではあるが。

4. 授業に対する心がけ

講義にあたっては次の三点を心がけた。第一に学生の信頼を裏切らない。そのために必要とされるのは、①シラバスに沿った授業 ②時間厳守 ③適正な課題と成績評価であると考えた。

講義名「文化分析批評入門」は学生にとっては難しく聞こえるらしく、学生からのコメントにも「講義のタイトルは難しく聞こえたけれど・・・」といった表現が見られた。それにもかかわらず、77名の受講生が集まってくれ、授業を受ける表情も真剣で、熱意が見られた。これはとりもなおさず、学生たちがシラバスの内容を熟読して履修を決めたためであろう。可能な限り正確なシラバスを提供し、その講義に関心をもつ学生を対象に授業する。学生はシラバスを見て履修を決めたのであるから、あまりにシラバスから外れた内容を提供したのでは、学生の信頼を裏切ることになる。そのためには、シラバス執筆段階からしっかりした授業計画を練らねばならないということになる。

時間厳守は当然であろう。成績評価に関しては前項で述べたのでここでは省略するが、学生にとっては、自分の努力や能力がどのような評価を下されるかが最大の関心事であることを忘れてはなるまい。学生が不公平な評価システムに対して不信感を抱くのは当然のことであり、授業担当者としては極力、公正な評価が下せるよう努力すべきなのだろう。

心がけの二つめは、学生とのコミュニケーションをとることである。その第一歩は、五感を共有することであると考える。「暑くありませんか」「ブラインドを下ろしますか」といった、教室の住環境をめぐる会話から学生とのコミュニケーションは始まるように思える。さらに学生たちの顔をみて講義し、学生たちとできるだけ目を合わせて発言を促すようにする。ただし、発言できずにいる学生を決して問い詰めることはしない。口頭による表現は非常に下手でも、深く物事を考えている学生たちを、私は大事にしたいからである。

理想的な講義は、学生たちと教師との間に双方向のコミュニケーションが成り立つ授業である。しかし、人数が多くなればなるほど、これを実現するのは非常に難しい。日本人学生に向くのは、ひとりのスタンド・プレー的な発表ではなく、一人一人は小さな作業をしてクラス全体で大きな仕事を完成させるというスタイルであろう。本講義では、「作者」と「作品」の関係を考えるにあたって、短歌づくりのゲームを行った。学生ひとりひとは紙にことばを書くだけだったが、全員の紙を集めて歌を作ったときには素晴らしい作品ができあがり、クラス全体で盛り上がった。学生にプレッシャーを与えることなく、授業に参加させる方式が彼らの性格にはあっているようである。

心がけの三つめは、学生にとってこの講義がどれだけ現実のものであるかを考えることである。教室から出た瞬間に講義のことを忘れてしまうようでは、本講義の意味はない。それではこの講義はたった4ヶ月間、教室という限られた空間に、90分という枠のなかで存在するにすぎない。そうではなく、日常生活のなかで本講義のメッセージがふと学生の心のなかに浮かび、講義の主旨を学生が実感する瞬間がなければならないのである。この講義を受けたことによって学生たちの現実認識が変化しなければならないのである。それを実現させるためには何が必要か。講義内容と学生の日常生活・学生生活とを結びつけることである。そのために本講義では次の二つを学生たちに促した。①本講義と他の授業との関連性を考える ②社会で起こっている事柄との関連付けをする。学生の所属専攻によっては、本講義の内容が専門の内容と真っ向からぶつかることもありうるのであり、そうした可能性も含めて、他の授業と本講義とを結びつけるように促した。

また、本講義の主旨をただ単に抽象的レベルあるいは文学の中でのみ提示するのではなく、本講義の視点によると現実社会の出来事すらも違って見えてくることを示すように心がけた。特に、ペドフィリアに関する講義は学生の反応が優れていたように思う。欧米におけるペドフィリアの状況は、日本における小児性愛者の状況と際立って異なっており、講義ではBBCやガーディアン紙などから得た情報をもとに欧米社会の状況を紹介した。そのうえで欧米のモラル・パニックがいかにペドフィリアを新たな性的マイノリティとして捏造しつつあるか、いかにことばが現実を作り出すかという本講義の主旨に結び付けた。そして、今

後の日本社会が向かうであろう方向、人権保護のあり方を学生とともに考えることによってこのテーマを終えた。

大学の講義を卒業のための単位取得あるいは就職のための技術習得だけに終わらせないために、今、教師に求められているのは、講義の知識が学生ひとりひとりのなかでいかに現実社会と結びつくかという視点であろう。

5. 今後への課題

今後への課題としては次のような点が挙げられる。第一に板書の工夫。内容が抽象的であればあるほど、学生がノートをとりやすいように工夫を凝らす必要がある。第二に低い音程での発声。学生にとって、甲高い声は集中力をそがれる。第三に欠席者への配布資料の渡し方。予め読んでもおいてもらいたい資料がある場合、欠席者に配布資料をいかにして渡すか。教室以外に学生と接触できる場所がなく、何らかの対策を大学全体で講じて欲しい点である。これは非常勤講師も抱えている問題であろう。第四に学生からのさらなる発言を誘う工夫。第五にわかりやすく効果的なシラバスを書く工夫。シラバス原稿の締め切りが11月と、結構早い時期に設定されていることも、今後検討をお願いしたい点である。特に後期科目は講義全体が半分も終わらないうちに翌年度のシラバスを書かねばならず、授業改善の大きな妨げになっているのではないかと。そして最後に、講義内容を深めるためのさらなる研究。講義の質は、いかに充実した研究を行っているかにかかっている。常に最新の知識と情報を学生に提供できるよう研究にける時間をいかにして確保するか、これが現在求められているもっとも困難かつ重要な課題であると考えている。

最後に、本講義を熱心に聴いてくれた学生たちに感謝したい。学生たちの熱心な眼差しはプレッシャーでもあったが、それこそが毎回の講義準備にけるエネルギーの源でもあった。私のつたない説明にもかかわらず、講義にしっかりとついてきてくれた学生たちの確かな理解力、そして授業終了後、数々の質問やコメントを携え、空腹の虫にも耐えて教卓の周りに集まってくれた学生たちの熱心さに支えられて、私の講義は成立したと思っている。「首都大1年生、万歳！」のエールを送ろう。